

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第191号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成30年3月21日

ノハラツグミ



2017. 12. 18 札幌市 真駒内公園

撮影者 早坂 泰夫 (札幌市厚別区)



## も く じ

ロシア極東・鳥紀行 (1)	美唄市	藤巻 裕蔵	2
中正 憲信さんを悼む	北海道野鳥愛護会会長	樋口 孝城	5
表紙の鳥 (ノハラツグミ)	札幌市厚別区	早坂 泰夫	5
2017年春・天売島探鳥記	北広島市	先崎 理之	6
2017年サロベツにおけるシマアオジ調査結果と講演会等報告			
	NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク	長谷部 真	8
野鳥情報コーナー			
札幌市平岡公園でシマゴマ	札幌市中央区	青木 優子	10
厚真町厚真川河口でコヒバリを発見!			
	岩見沢市	先崎啓究、滋賀県大津市 猪狩 敦史	10
オホーツク初記録! コホオアカ			
	根室管内別海町	工藤 茜	11
探鳥会ほうこく			11
鳥民だより			15
探鳥会あんない			16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<http://www.aigokai.org>)で閲覧することができます。

# ロシア極東・鳥紀行 (1)

美唄市 藤巻 裕蔵

## 北の鳥

私は高校時代までを東京で過ごしたが、北の鳥にあこがれ、大学時代から北海道に住みついている。1957年4月に札幌に来たので、北海道での生活はもう60年以上になる。この間道内をあちこち歩き、大雪山ではギンザンマシコやハギマシコ、天売島ではウミガラスやウトウ、モユルリ島ではエトピリカやチシマウガラスなど、見たいとおもっていた鳥たちを観察してきた。

北海道で鳥を見ていると、もっと北の鳥を見たくなくなるのは私だけではないと思う。北海道に渡来する旅鳥や冬鳥のおもな繁殖地はロシア極東であるが、これらがどんな環境で繁殖しているのかを一度は見てみたいという思いが強くなってきた。しかし、かつて旧ソ連時代には「鉄のカーテン」に遮られ、鳥の観察・調査など観光以外の目的でソ連に入ることはまず不可能であった。それが実現したのは1988年のことである。それまで文献でしかうかがい知ることのできなかったロシア極東の自然を、自分の眼で見ることがやってきたのである。

1980年代末、ゴルバチョフ大統領の時代になって「ペレストロイカ」が始まった。これを契機に稀少鳥類に関する日本野鳥の会とソ連科学アカデミーとの協議の結果、共同調査が始められることになった。調査対象は第1回が1988

年のナベヅル、続いて第2回の1989年のオオワシ、第3回は1990年のコウノトリである。私は、このうち第1、3回の調査に参加することができた。その後も、オオハクチョウ、エゾライチョウ、シマフクロウ、ワシミミズクなどの調査、渡り鳥保護関連の会議や国際学会などでロシアには20回近く行っている。調査で訪れたのは、南はロシア沿海地方のウラジオストク近郊から北はレナ川沿いの北緯64度付近までの数か所と鳥ではサハリンである。ロシアは日本に比べて広大で、調査地となるような地域までは道路網も不十分なので、アクセスが大変である。また調査地近くに宿泊施設がない場合がほとんどである。ロシアでの鳥類調査の際の生活は、日本での場合とかなり違う。

ロシアでの鳥類調査について、素晴らしい自然とともに、調査生活の状況を交えながら数回にわたって紹介したい。

## ナベヅル調査

ナベヅルの調査地は沿海地方北部ビキン川沿いの湿原である(図1)。「ビキン」とはウデヘ族の言葉で「山と山の間を流れる川」を意味する。この川はシホテ・アリン山脈に源を発し、山々の間を西に向かって流れ、ハバロフスクの南約200kmでウスリー川に合流する。

繁殖期のナベヅルの分布域はバイカル湖の東からサハ共

和国 (ヤクーチャ) にかけての地域とアムール川中・下流域などとされているが、当時繁殖地として知られていたのはこのビキン川沿いだけである。

私たちのナベヅルの調査は、調査地に一番近いヴェルフヌイ・ペレヴァル村に到着した翌日、5月8日の巣探しから始まった。ナベヅルは湿原の中でも低木が疎生する環境で営巣するため、平坦な地形では見通しが悪く巣探しは容易なことではない。湿原の中を歩き営巣に好適な環境を探したり、木に登って成鳥がどこにいるかを観察したりする必要があった。木登りは地元の研究者の仕事である。彼らは梯子も使わず、直径20～30cmもある木に登っていく。その様子はまるでクマのようであった。

このような調査を続け、幸いなことに数日後に抱卵中の巣を見つけることができた。これ以前に見つかった巣は11例なので、このときの巣は12番目の発見ということになるとのことであった。巣の発見で、この調査の半分以上の成功を取めたことになる。観察のため巣から約50mにブラインドを張り、3日後には約25mまで移動し、観察を続けた。ナベヅルもタンチョウと同じく雌雄交代で抱卵する (写真1)。

巣発見の10日後、5月23日に嘴打ちが始まり、翌11日目の朝に1羽、夕方にもう1羽が孵化した。幼鳥は全身黄土色の幼綿羽で被われていた。25日に幼鳥はまだ巣近くにいたが、28日には巣から500m離れた林縁に2羽とも両親と



写真1. 抱卵中のナベヅル

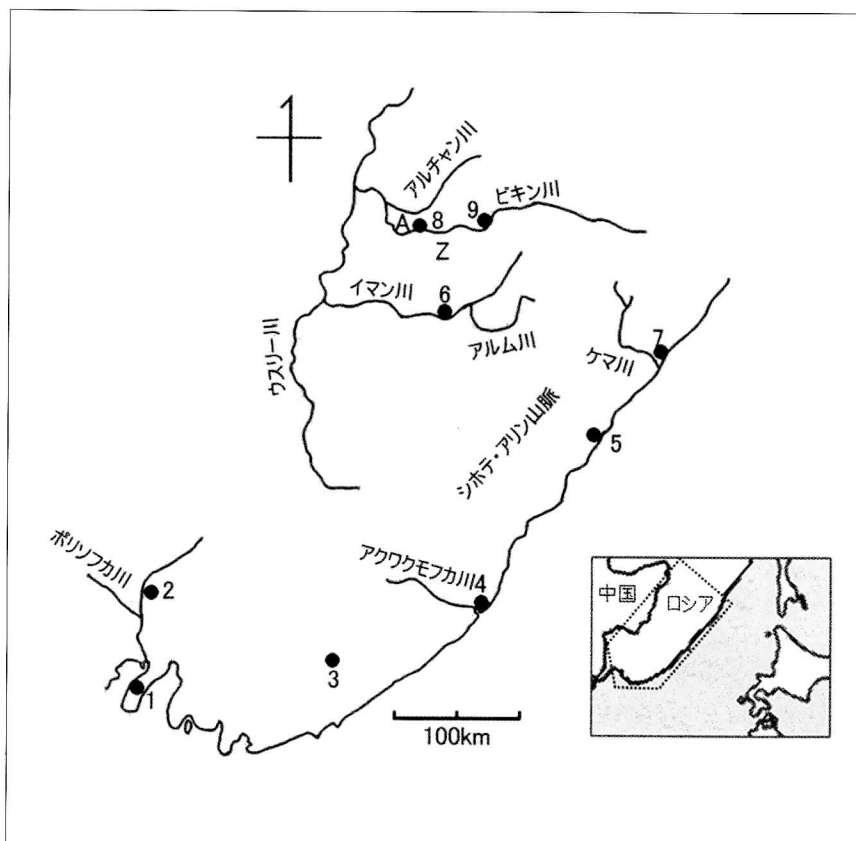


図1. 訪れた場所の位置図。A=アルチャン湿原、Z=ズメイナヤ湿原、1=ウラジオストク、2=ウスリースク、3=ラゾ、4=オリガ、5=テルネイ、6=ヴォストレツォヴォ、7=ケマ、8=ヴェルフヌイ・ペレヴァル、9=クラスヌイ・ヤル

一緒に見られた。この日の観察を最後に私たちは営巣地を離れた。

### ビキン川沿いの湿原

地図帳 (1/20万) を見ると、ビキン川中流部沿いには数多くの湿原がある。中には釧路湿原に匹敵するような大きなものもいくつかある。私たちはこれらの湿原のうち2つで調査をし、その1つ、ズメイナヤ湿原 (図1) で巣を見つけたわけである。

ロシアでは、山間部にあつて周りを森林に囲まれているようなこれらの湿原を「マーリ」と言っている (写真2)。

マーリはおもにミズゴケからなり、ミズゴケが饅頭のように厚く高くなった部分にはツツジ類、ツルコケモモ、小さなハンノキやヤナギが生えている。ミズゴケの他にもワタスケなどがあり、このような所では水深が20～30cm、深い所では50cmもある。こうなると日本から持参した長靴は使えず、現地で調達した股下まである長靴 (サバギ) でなくては駄目である。

マーリの中のやや高くなった部分には「リョールカ」と言われる小面積の林があり、鳥のように散在している。リョールカの樹種はハンノキカラムツであるが、林床が



写真2. ビギン川沿いのマーリ (湿原)

乾燥していると樹種はナラ、カンバ、ハルニレ、ヤチダモなどとなる。クマガラが散在するいくつかのリョールカを飛回っているのが印象的であった。

マーリのいたるところにはノロ (シカの1種) やアカシカによるとおもわれる「獣道」ができており、幅40~50cmの水路のように見える。マーリのツツジ類や小さな木のある所では非常に歩きにくいので、私たちはマーリ内を移動するときにはもっぱらこの獣道を利用した。それでも普通の道路を歩くのとは違い、マーリ内の移動にはかなりの時間を要した。

マーリには開けたヨシ原になっている部分がある。私にとってはこの方が湿原らしく見えるのだが、ナベヅルはこのような開けた場所では見られず、低木が疎生する見通しのあまりよくない所に生息していた。このような状況を観察していると、ナベヅルが湿原の鳥という感じがまったくしない。この点はタンチョウとは明らかに違うと思った。

#### 調査開始

日本では、野外調査といっても大抵は列車か路線バス、車を利用して調査地に入ることができる。しかし、ロシアでは日本のようなわけにはいかない。とくに調査対象がナ



写真3. 舟で調査地に向かう

ベヅルやコウノトリのように稀少種の場合には目的地が人里離れており、人がほとんど住んでいない場所なので、公共の交通機関はなく、場合によっては道路さえない。

まずは調査地に近い村落に入ることになるが、ここまでは列車、ヘリコプター、車が使える。交通機関以外でも、人口の少ない小さな村落ではホテルのような宿泊施設はなく、ロシアの研究者の知合いの家などに泊めてもらうことになる。ここでいろいろと調査のための準備をするが、まず必要なのは、移動手段の確保、調査基地設営に必要な用具類の準備、数日分の食料の購入、私たちが日本から持込んだ調査用具の点検などである。私たちが到着するまでにロシア側が大方の準備をしてくれているので、必要なのは食料の買出しと私たちに足りない調査用具、例えばサパギをそろえるくらいである。

ナベヅルとコウノトリの調査では目的地がビギン川沿いとその支流のアルチャン川沿いだったので、移動はいつも船外機付きの舟であった (写真3)。調査の開始と終了の時には、数艘の舟に機材や食料、各人の荷物などを積んで運んだ。このほか、数日おきに主食の一つであるパンを買入れに行くときも舟であった。ビギン川沿いではこの船外機付き舟が主要な移動手段のようで、調査中1日に数回は荷物を載せたボートが川を行き来するのを見ることができた。

調査地に着くと、まずマーリの中でも一段と高くなっていくリョールカを選んで基地の設営である。食事用のテーブルとイスをつくり、雨のときでも使えるように上に大きなシートを張る。次に炊事場造りであるが、いたって簡単で、近くの適当な太さの木を切ってきて、やかんや鍋をつるすための杭を立てるだけである。また、暖をとるための焚火や炊事に、付近から枯木や枯枝を集めてくる。最後は、調査隊員用のテントと食料や調査・撮影機材を入れるテントを張り、これで全て基地設営完了である (写真4)。

(つづく)



写真4. 調査基地でのナベヅル調査隊  
(後列向かって右端が筆者)



## 中正憲信さんを悼む

北海道野鳥愛護会会長 樋口孝城

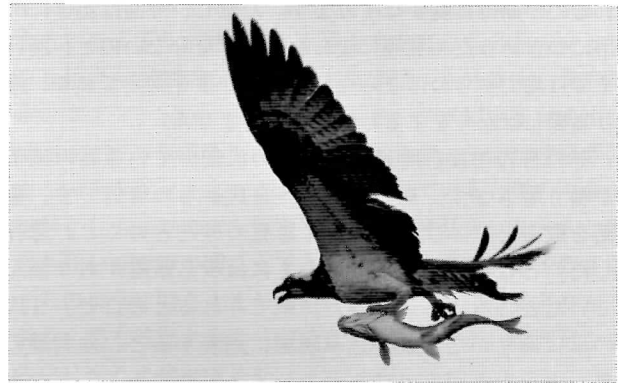
愛護会の幹事を長年務めて来られた中正憲信さんが、昨年（平成29年）12月21日にご病気のため逝去されました。満79歳でした。

中正さんは平成6年に奥様（弘子様）ともども入会されました。2年後の平成8年には総務幹事に就かれ、その翌年には総務幹事代表の要職を任せられることになりました。次いで、18年には探鳥幹事代表となり、24年まで務められました。その後は総務、探鳥ともに良き後継者を得られ、ご自身は幹事スタート時の総務の一幹事として熱心に職務を果たして来ておられました。一昨年、私の会長就任に合わせて、正規の役ではありませんが、個人的な相談役をお願いして、会運営の助言などをいただいてきました。

ずっと支えていただくつもりでしたが、一昨年あたりから体調不良となられたようです。そのため、昨年3月に幹事を退任され、その後、入院を繰り返されていましたが、闘病虚しくお亡くなりになりました。幹事職にあって会を支えられてきたこと20年余、その貢献はいくら感謝の言葉を重ねても余りあるものでした。

愛護会活動だけではなく、国内・国外旅行などにも、いつも奥様とご一緒に行かれ、世界・日本の各地の自然や野鳥を楽しんでこられました。また、10年ほど前からは野鳥写真撮影にも取り組んでおられました。

写真は愛護会の石狩川河口探鳥会の時に、参加者のすぐ近く、獲物を掴まえて飛ぶミサゴを撮った中正さんの傑作の1枚です。この写真は当時の北海道新聞に「水辺の狩人、鋭い爪に獲物」という記事に使われました。葬儀の祭壇には、奥様の手により、この記事の切り抜きが飾られており、改めて在りし日の中正さんを偲ぶことができました。野鳥写真は、それを撮影した人の思い出を残すものということを実感しました。お元気であれば、まだまだ愛護会を背負ってくれた人の一人だったはずです。本当に惜しい人を亡くしました。心よりご冥福をお祈り致します。



ミサゴ 2014.8.24 石狩川河口付近 撮影：中正憲信さん

### 表紙の鳥

### ノハラツグミ



近年、観察記録が増えているノハラツグミですが、今冬は、日ごろ散策している野幌森林公園で、11月20日に記録されました。どんなツグミだろうと気になり、数日探してみましたが見ることはできませんでした。12月に入り、真駒内公園でノハラツグミを観察することができるという情報をいただき、幸運にも、12月18日に見る事ができました。赤い実が溢れんばかりについている大きなナナカマドの木で採餌している姿はとても綺麗でした。大きさは、ツグミより少し大きくて、頭部の青灰色と白い眉斑が印象的でした。

ノハラツグミはこれまで、数少ない迷鳥として図鑑などで紹介されてきましたが、「北海道野鳥だより」では176号、180号、189号と観察記録が増えていることが報告されています。気象の影響などで渡りのルートから外れたものなのか、渡りのルートが変わってきているのか、分かりませんが、今後、「迷鳥」から「数少ない冬鳥」として定着していくのか、興味のあるところでは。

早坂 泰夫（札幌市厚別区）

## 2017年春・天売島探鳥記

北広島市 先崎理之

渡りの時期の楽しみの一つに、日本海側の離島での探鳥があります。滅多に見られない迷鳥目当てに、毎年のようにどこかしらの離島に渡っている人もいないのではないのでしょうか。かく言う私も近年は年に1～2回のペースで天売島を中心に通っています。昨年春も少し変則的な日程ですが5月24～25日、26～29日と滞在できましたのでその成果をご報告いたします。

5月24日10時、快晴の中、天売港に着岸しました。約半年ぶりに訪れる天売島ですが、今回はどんな渡り鳥が見られるのか期待に胸がはずみます。ただし、今回は25日に所用につきいったん札幌に戻らなければならないのと、26日までは島でやらねばならない大事な仕事を抱えており、渡り鳥探しばかりをするわけにはいきません。

その日の午後5時過ぎ、まじめに働いている私の携帯が鳴り響きます。鳥のバーダーS氏からの着信です。電話を取ると、イワミセキレイを見つけたとのこと。急行したいところですが歩いていくには少し距離があり悩んでいたところ、S氏が迎えに来てくれるとのこと。S氏の車にありがたく乗り込み現場に到着すると、砂利道の真ん中を歩き回るイワミセキレイと対面することができました(写真1)。イワミセキレイは2011年5月中旬にもロンババ浜で見かけていますが、今回の個体はその個体に比べて抜群に愛想がよく、じっとしているとどんどん近づいてきました。観察しているうちにすっかり日没も近くなってきたのでこの日は仕事も鳥見も終了し宿に戻ります。



写真1. イワミセキレイ 尾羽の振り方が特徴的

25日、この日は午前便で離島しなければいけないため、フェリーが来るまでしか時間がありません。早朝に集落のあたりをうろつく時間を無理やり作りますが、コホオアカ1羽(写真2)、亜種カラアカモズ\*1羽が見つかる程度。少し雲がありますが、基本的に晴れており、渡り鳥の動きは低調なようです。10時半、フェリーに乗り込みいったん島を離れました。



写真2. コホオアカ 民家の畑で餌を食べる

26日、再び渡島するため早朝より羽幌港へ向かいます。この日より鳥見目的ではるばる愛知県からやってきた鳥友のT氏が合流します。渡り鳥の状態は改善してくれるのでしょうか。午前10時、再び天売島入りし、私は仕事に、T氏は鳥見に向かいます。この日、私も何か見つかればすぐに出かけられる準備をしていましたが、残念ながら終始渡り鳥が低調だったようで、日没まで吉報が聞かれることはありませんでした。しかし、この日はこれでは終わりませんでした。渡り鳥の少なさを気にかけてくれたのが、島のバンダーA氏が夜の鳥目当てに車で鳥を廻してくれるのです。少し風が強く苦戦しましたが、トラフズク1羽、オオコノハズク1羽を確認することができました。

27日、この日からは思う存分鳥見を楽しめます。早朝は、今回情報が有りながらまだ探しに行けていなかったコウライウグイスを狙いに富磯から黒崎にかけての海岸に向かいます。すると富磯集落を抜けたあたりで、目的のコウライウグイスとあっさりと対面することができました(写真3)。2羽おり、いずれも第一回夏羽の個体でしたが、海岸沿いの低木につく毛虫を食べにこの種にしては目立つところに出てきており、じっくり観察することができました。朝食後は前浜漁港から神社方面を歩きます。キビ



写真3. コウライウグイス お腹に縦斑が残るが黄色く美しい

タキ、オオムシクイ、サンショウクイなどが少し増えており、朝から天気の下り坂なためか多少鳥が動いているようです。とはいえ仕事の疲労と好調とは言えない渡り鳥、それに午後からの雨予報にすっかりやる気をなくした私は、昼からはA氏宅で行われたバーベキューに参加し、夕方近くに意気揚々と宿に戻ったのでした。なお、雨の中粘り強く歩き続けたT氏は林内で鳴くシマゴマ1羽を確認したほか、チゴモズの情報もありました。

夜半まで降り続いた強い雨は28日の早朝にはすっかり弱まっています。この日は気圧配置が良く、午前中は強い南西風が吹き付け、時折雨が降るといふ渡り鳥が降り立つ条件が揃っていました。そこで早朝が勝負と考え、T氏とともに夜明けより天売神社、海龍寺、そして林内の順に歩きます。すると予想が早速当たり、海龍寺近くのブッシュでマミジロキビタキ雌(写真4)とムギマキを幸先よく発見します。マミジロキビタキは春の天売島ではそれほど珍しくはありませんがやはり見られると嬉しい鳥です。そして林内に入ると、暗いカラマツ若齢林でシマゴマがさえずり、トラフズクが飛びます。風の弱いトドマツ林にはムギマキ、サメビタキ、オオムシクイの群れが入っており、いたるところでさえずっています。さらにこれらを観察していると、白い眉斑とお腹のレモンイエローが美しいヒタキが目の前に現れました。マミジロキビタキの雄です。すると今度はカラフトムシクイ、マミジロと前日までの鳥の少なさが嘘のように様々な種類の渡り鳥が次々に現れます。



写真4. マミジロキビタキ雌 腰が黄色く雨覆の縁が白い

その後、朝食のため一端宿に引き返しますが、ゆっくりとご飯を食べているわけではありません。さっと朝食を済ませ、今度はロンババ浜に向かいます。前日まではオオヨシキリがいる程度でめぼしい鳥は何もいなかったのですが、打ち上がった海藻にコバエが湧いており渡ってきたばかりの何かがついているかもしれません。高まる期待を抑えつつ慎重にチェックしていきます。海藻の上を歩くコムクドリのつがいを見ていると、いきなりコムクドリによく似た違和感のある個体が飛び出してきました。「シベリアムクドリ！」間髪入れず絶叫するT氏。美しい雄のシベリアムクドリです(写真5)。コムクドリのつがいについて行くものの、独り身のシベリアムクドリはかなり煙たがら

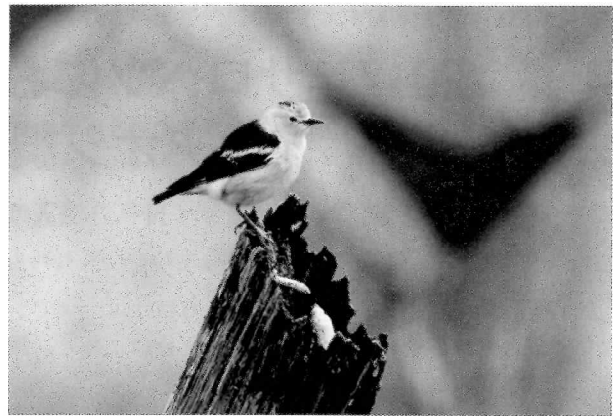


写真5. シベリアムクドリ雄  
日本海の離島ではもっぱら5月中下旬にでる

れている様子です。

シベリアムクドリの観察を終え、早朝に良かった林内のポイントに引き返します。途中、朝とは別の場所でマミジロキビタキの雄を見かけました。さらに別の場所でもそれらしいさえずりが聞かれ、どうやらそこそこの数のマミジロキビタキが鳥に入ってきたことがうかがえます。先の林内のポイントでは、多数のムギマキ、サメビタキ、オオムシクイが引き続き活発に活動しています。午前10時過ぎ、カラフトムシクイとマミジロの雌を見ていると奥のカラマツ林からメジロに少し似た「チョリチョリチョリ…」と何やら怪しげな声が聞こえてきます。ヤナギムシクイのさえずりのように聞こえましたが近づいたところには鳴きやんでおり、姿も確認することができず、残念ながら種同定をするには至りませんでした。

その後は天候が一気に回復し、島中の渡り鳥も減っていくように感じました。28日午後と離島前の29日午前中にも島内を歩き回りましたが、28日早朝の賑わいが嘘だったかのように、渡り鳥が増えることはありませんでした。渡り鳥たちが直接島から飛んでいくところを観られたわけではありませんが、やはり28日早朝は悪天候で一時的に島に降り立った渡り鳥が多かったように思います。このようなダイナミックな渡りを感じられるのも離島での探鳥ならではの言えるかもしれません。今回はこの時期定番の種類(チョウセンメジロ、オジロビタキ、アカマシコなど)も観察できませんでしたし、全体的に渡り鳥が少なかったように思います。それでも、繁殖地に急ぐ鳥たちの渡りを十分に実感することができました。なお、春の北海道の離島はまだまだ連休ごろが注目されがちですが、迷鳥や夏鳥の渡りの観察には5月中下旬のほうが向いているように思います。実際、近年の天売島では、5月中旬以降にインドガン、コウライクイナ、ズアオホオジロといった日本でも指折りの迷鳥が記録されています。皆さんも是非、この春は渡り鳥や迷鳥との出会いを期待して日本海の離島を訪れてみてはいかがでしょうか。

(※編集部注：亜種カラアカモズは、日本鳥類目録改訂7版上、検討中の亜種とされています)

## 2017年サロベツにおける シマアオジ調査結果と講演会等報告

NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部 真

2017年は環境省の事業により、私たちはサロベツでシマアオジの繁殖状況と生息確認の調査を行いました。調査の結果、雄のさえずり場所（ソングポストや鳴き声が聞こえた場所）の数から、サロベツ湿原センター木道周辺で4つがい、別の繁殖地で17つがいの生息を推定しました（写真1）。雄だけでなく、雌、巣材運び、幼鳥も確認しました（写真2、写真3）。生息確認調査では4地域で調査を行った結果、シマアオジが新たに確認されたのは1地域だけでしたが、さえずり場所の数から10つがいの生息を推定しました。2つの調査結果を合わせると全部で31つがいになります。2016年には5つがい以下と少なく推定したのは、調査が不十分だったことが原因で、2017年に数が増えたかはわかりません。現在サロベツでシマアオジの生息が確認されている場所は狭い範囲に限られており、数も少ないため、危機的状況に変わりはありません。ただ、国際的にシマアオジのよい知らせがなかったため、海外の関係者から喜びの声が届きました。



写真1. シマアオジ雄 2017.7.4



写真2. 巣材を運ぶシマアオジ雌 2017.5.31



写真3. シマアオジ幼鳥 2017.8.3 撮影：川崎正大さん

2017年11月26日に環境省の主催で札幌の北海道大学総合博物館でシマアオジのシンポジウムが開催されました。当日は雪が降る天気にもかかわらず、会場が満員となる90名余りが参加し、札幌におけるシマアオジに対する関心の高さがうかがえました（写真4）。シンポジウムでは私がサロベツのシマアオジの生息状況について、（地独）北海道立総合研究機構環境科学研究センターの玉田克巳氏が北海道のシマアオジの減少と今後の対策について、バードライフ・インターナショナル東京のシンバ・チャン氏が海外のシマアオジの状況と国際的な保全対策について報告しました。

玉田氏の報告によると、シマアオジは2017年に種の保存法による国内希少動物種に指定されることになりましたが、保全事業としての保護増殖事業等が実際に行われるか不明です。シマアオジ減少の主な原因は海外の要素が強いため、これまで留鳥中心だった保護増殖事業を行うにしても、どのように取り組むかが新たな課題となります。シマアオジの国際的な保全活動の中心的な役割を果たしているシンバ・チャン氏の報告によると、シマアオジの密猟はまだなくなっていますが（写真5）、中国は2017年に法律を改正し、シマアオジの捕獲だけでなく、消費も違法になりました。さらに2016年に中国で開催されたシマアオジ





写真4. 満員だったシマアオジ札幌シンポジウム

ワークショップをきっかけに国際的なネットワークが形成されています。2017年にはロシアや香港などで渡り経路や亜種の解明を行うために、シマアオジに色付きの足環が装着され、DNAも採取されました。2018年にこれらの地域ではジオロケーターの装着が検討され、越冬地である東南アジアでも新たな調査が進められる予定です。



写真5. 2017年に中国で押収されたシマアオジ  
写真提供：シンバ・チャン氏

報告の後、NPO法人EnVision環境保全事務所の長谷川理氏が進行役を務め、シマアオジの保全について対談しました。国際的には、今後も関係者間で情報共有や調査を連携して行い、中国や越冬地を中心に教育・普及啓発活動を行い、保全対策を働きかけることの重要性を確認しました。北海道全体としては、シマアオジの生息情報があった場合に情報共有できるようにすることと、シマアオジを含む草原性の鳥類を保全するために、生息環境である草原を保全することの重要性で一致しました。シマアオジ札幌シンポジウムを開催するにあたって、北海道大学総合博物館、北海道野鳥愛護会、日本野鳥の会札幌支部、NPO法人真駒内芸術の森緑の回廊基金などの皆様のご協力いただきましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

2018年2月10日に環境省主催で、豊富町で地元向けのシマアオジの報告会が開催され、周辺地域の関係者約30名が参加しました。報告会では、2017年サロベツにおけるシマアオジ調査結果と札幌シンポジウム報告のほか、専修大学北海道短期大学名誉教授の正富宏之氏を講師として招き、

1970年代から80年代にかけて北海道各地で行った鳥類調査結果の中から、シマアオジの調査結果について報告していただきました(写真6)。正富氏の報告によると、かつては北海道各地で草原の環境を中心にシマアオジが普通に確認されていたことがわかりました。

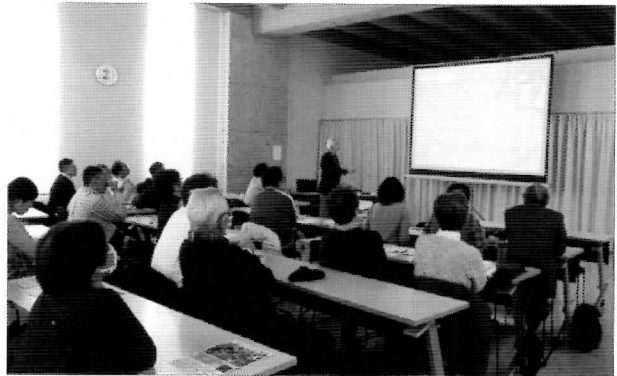


写真6. 豊富町で開催されたサロベツ・シマアオジ報告会

サロベツでは繁殖状況調査や生息確認調査を継続することにより、今後の動向を見守る必要があります。その周辺には可能性がある場所では生息確認の調査を行う必要があります。サロベツで可能な保全対策として、現存する繁殖地を拡大することが望まれます。残念なことに、サロベツの最大の繁殖地の周辺は湿原の乾燥化に伴って形成されたササ群落に囲われていますので(写真7)、シマアオジが現在繁殖している湿原の環境を増やすことが必要です。嬉しいことに、ここ数年シマアオジの姿が確認されていなかった未開発のまま残された民有地に、2017年に再び姿が確認されました。ナショナルトラスト運動などによりこのような土地を購入し、保全することも考えられます。

北海道各地では過去にシマアオジが生息していた場所にシマアオジが戻って来た時に備えて、生息確認の調査や情報共有を行い、シマアオジの保全活動を行うための全道規模のネットワークを作ることも必要です。シマアオジを保全するためにはサロベツだけでなく、北海道全体の協力体制が必要ですので、今後とも皆様のご支援とご協力をよろしくお願い致します。

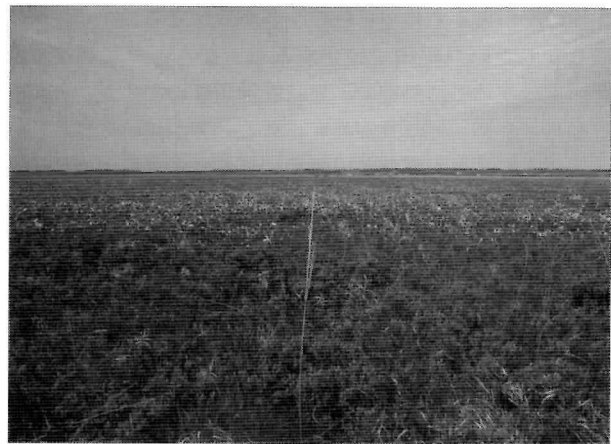
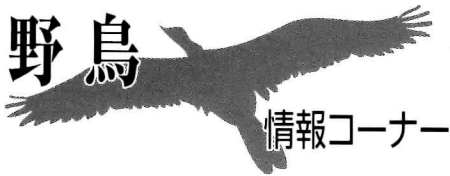


写真7. シマアオジの繁殖地とその向こうに広がるササ原



# 野鳥



情報コーナー

## 札幌市平岡公園でシマゴマ

札幌市中央区 青木 優子

昨年(2017年)5月19日、札幌市清田区の平岡公園でシマゴマに出会うことができました。この日は、春の渡りの鳥を求めて母と一緒に写真撮影に出かけました。園内にはオオルリやキビタキの姿、コルリの囁きも聴こえ賑やかでした。私はコルリの撮影をしようと、声のする場でジッとしていたのですが、辺りも暗く人通りが少なくなった頃に、道脇の笹藪から一羽の小鳥が出てきました。その鳥の姿を見たのは短い間です。道脇から出てくると一瞬、道の真ん中で立ち止まり、またすぐに反対側の笹藪の中へ入ってしまいました。はじめはコルリの雌とも思いましたが、胸の辺りの模様が気になりました。小さな違和感があったのですが、周囲も暗く距離があったこと、すぐに姿を隠してしまったため、その後はコルリの撮影を優先しその場も離れてしまいました。

シマゴマとわかったのは後日、画像整理をして図鑑を調



シマゴマ 2017.5.19 札幌市清田区平岡公園

べた時です。この時に識別に詳しい知人にもみて頂き、間違いないと判断しました。

今回、ご縁があって会報での報告の機会を得て、シマゴマの過去の観察データについても詳しく教えていただきました。北海道鳥類目録改訂4版(藤巻裕蔵)によると、シマゴマは焼尻島、利尻島など日本海側の離島で観察されているようですが、北海道中央部、まして札幌市内で観察されたというのはたいへん珍しいとのことでした。

このように観察する機会の少ない鳥に出会えた事はとても幸運でした。ただ、あの日にコルリの撮影を優先せず、もう少しその場にいたらもしかして…?と小さな心残りも。今後の野鳥撮影の際には、小さな違和感をもっと大切にしていきたいと思いました。

## 厚真町厚真川河口で

### コヒバリを発見!

岩見沢市 先崎 啓究  
滋賀県大津市 猪狩 敦史

2017年12月13日、胆振管内厚真町の厚真川河口でコヒバリ1羽を観察しました。午前9時半頃に車でゆっくりと河口左岸の砂浜を流していると、サーファーが付けたであろう轍の端から1羽のバフ色の小鳥が飛び立ち、すぐに脇に降りました。双眼鏡で確認すると、なんとコヒバリでした。実は初めての観察で、地味な種類なのですが、とても感動しました。ヒバリよりも小さく、脚が短めに見え、嘴は太短くて丸みを帯びています。ヒバリよりも上面に黒味が少なく、全体に淡い色が特徴です。また、春季の渡り時期に稀に見られるヒメコウテンシにも似ていますが、コヒバリは三列風切がより短く、静止時、初列風切の突出量が多いことが特徴です。

現地では数日前に積もった積雪の影響で雪が多く、点在する地面が露出する場所を数か所ローテーション的に移動しながら地上で何かを採食していました。とても用心深く、車の接近やささいな物音を嫌い、走り去ったり、飛び



コヒバリ 2017.12.13 胆振管内厚真町

ヒバリより嘴が太くて体色が淡く、ヒメコウテンシよりも初列風切の突出が多いことがわかる。

去ったりしてすぐに逃げますが、採食場所の近くに車を止めてじっと待っていると時折近くまでやってきて観察することができました。飛翔時は尾羽が短く、翼の幅が広く見えるシルエットからなのか、ヒバリというよりは色の薄いツメナガホオジロに似た印象を受けました。飛び方もツメナガホオジロやユキホオジロに似ているように感じられました。声の特徴的と言われているのですが、残念ながら今回は聞くチャンスがありませんでした。その後同日の昼前くらいまで同所付近で数回確認できましたが、その日以降

は見つけられていません。

道内では冬季、道東を中心に数例の記録があるようですが、胆振管内ではとても珍しいのではないのでしょうか。まめにフィールドへ通っていたことが功を奏し、初めて見る

鳥を自力で見つけられるとはなんて幸せなことでしょう。毎度そう上手くはいかないですが、今後もさらなる出会いに期待したいところです。

## オホーツク初記録！コホオアカ

根室管内別海町 工藤 茜

気づかぬうちに初めて見た——

——しかもオホーツク管内で記録されていなかった!?

私、工藤は大変な記録を出してしまったようだ。

2018年1月14日。網走での探鳥会に参加した後、ミヤマホオジロの情報を得て、その場所へ行ってみることにした。工藤はミヤマホオジロを未だに見たことがない。今度こそ！と思い、半ば期待しながら探してみることにした。

到着したのは夕方の為、短時間勝負で探した。先ほど探鳥会で会った方々も見に来ていた。その方々はミヤマホオジロが先ほど来て、たった今去って行ったというのだ。何という事だ！今回も工藤は見られないのか。それでも待ってみた。しかし来そうにない。期待し過ぎたのか。先ほど見た方々は皆退散し一人だけになった、その時だ。カシラダカの群れと一緒にミヤマホオジロの群れもいるではないか！念願叶った！ルンルンになりながらカシラダカと一緒にカメラに収めて帰宅した。

撮った写真を見てみた。夕焼けに染まったミヤマホオジロやカシラダカを見ていると、一部カシラダカの雌なのか迷う個体があった。とりあえずカシラダカとしてその写真をtwitterに上げてみた。早速リプライ(返信)が来た。なんと「コホオアカ」もいるというのだ！同定に迷った個体かと



コホオアカ 2018.1.14 網走市呼人

思い聞いてみると、確かにその個体だった。思わぬ初見であった。道東でしかも冬にコホオアカは珍しいと思い、日本野鳥の会オホーツク支部に聞いてみると、オホーツクでは未記録だというのだ！まさかコホオアカを生まれて初めて見た上にオホーツク初記録だなんて。震えてきたのだった。最早ミヤマホオジロはどうでもよくなった。

今までもコホオアカは来ていたのかもしれないが、工藤のように識別が未熟な者ばかりで気づかなかったのかもしれない。それがSNS(twitter)を活用したおかげで気づくことができた。コホオアカもすごいがSNSの力は偉大だと思った初記録であった。



ヤング探鳥会  
測量山、マスイチ展望台  
(室蘭市)  
2017. 10. 15

カ、ノスリ、ハヤブサ、カケス、ホシガラス、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、メジロ、ハクセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ホオジロ、アオジ

以上25種

【参加者】16名

北海道のヤングBirder集まれ！ということで、「ヤング探鳥会」の活動を開始し、記念すべき第1回目は室蘭でタカの渡りを観察しました。今後も普段の探鳥会では行けない場所で探鳥をしたり、珍鳥が出たら急遽遠征したりする予定です。バードウォッチング仲間のネットワークづくりの場としても役立ててもらいたいと思います。随時メンバー募集中です！初心者大歓迎です！

(h.young.tan@gmail.com 田中までご連絡ください。)

【記録された鳥】クロガモ、アオバト、ウミウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタ



探鳥会で観察されたオオタカ 撮影：北山政人さん

## 十勝 宿泊探鳥会

2017. 10. 21~22

札幌市西区 温井 日出夫

天候があやしくなる中、バスで十勝に向かい、池田町で探鳥ガイドの千嶋淳さんと合流し、探鳥開始となりました。千嶋さんの風貌から、失礼でしょうが僕は勝手にドラエモンに出てくる「ジャイアン」を思い浮かべ、案内を聞いておりました。「ジャイアン」からの十勝の鳥達や動物の話は、純で大らかで自然への深い愛情を感じましたし、地域を知り尽くしているので案内も実に的確でした。最初にタンチョウが現れた時、タンチョウも最近の調べでは一生を添い遂げない「つがい」もあるとのこと、今回は家内との参加でしたので、なぜか少し動揺しました(笑)。天候は相変わらず今一でしたが、牧草地にマガン、ヒシクイの群れ、そしてシジュウカラガンの群れ、ハクガン1羽が見つかり、皆のテンションが急上昇、更にハクガンの群れにぶつかることもう歓喜、歓喜。「ジャイアン」に、参加者の日頃の行いの良さが評価された瞬間でした。興奮冷めやらぬ中、大津漁港へ。小雨の中、見られた鳥はユリカモメが主でしたが、エナガにも似た顔に癒されました。この日の終わりに、再びハクガンのいた場所に戻ると、ガン達の群れは小さくなっていましたが、遠くの空からオオハクチョウ、シジュウカラガン、そしてハクガンと次々に舞い戻り、夢のようなシーンが続きました。もう空は暗くなりかかっておりましたが、帰り際にハクガンが一斉に飛び立ち、皆の頭上を越えていきました。

泊まりのホテルに入り、大勢の仲間がモール温泉につかり、会食、酒に酔いしれた翌日は、余裕をもってオオワシ、オジロワシなどを見て帰札、僕のところは池田町で買った町民還元ワインで乾杯。めでたし、めでたし。

「ジャイアン」の情熱、愛護会の幹事さんの血の出るようなご苦労で結実した、奇跡の宿泊探鳥会でした。



探鳥会で観察されたハクガンとヒシクイ

撮影：温井日出夫さん

### 【記録された鳥】

(10.21) 育素多沼、幌岡周辺、大津漁港、三日月沼周辺  
ヒシクイ、マガン、ハクガン、シジュウカラガン、オオハク  
チョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、

コガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カイ  
ツブリ、アカエリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサ  
ギ、ダイサギ、タンチョウ、オオバン、ユリカモメ、ウミ  
ネコ、カモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、  
チュウヒ、オオタカ、ノスリ、アカゲラ、コチョウゲンボ  
ウ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウ  
カラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、ムクドリ、ホシムクド  
リ、スズメ、タヒバリ、カワラヒワ、ベニマシコ、アオ  
ジ、オオジュリン、カワラバト (ドバト)

以上47種

(10.22) 十勝ヶ丘展望台、千代田新水路、清見ヶ丘公園  
ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、ホオジロガ  
モ、ミコアイサ、カワアイサ、キジバト、アオバト、アオ  
サギ、タンチョウ、ユリカモメ、ウミネコ、シロカモメ、  
オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、カワセ  
ミ、アカゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラ  
ス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒ  
バリ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ツグミ、スズ  
メ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ベニマ  
シコ、シメ、ホオジロ、オオジュリン、カワラバト (ドバ  
ト)

以上41種

【参加者】池田みちえ、石橋和子、今村三枝子、岩井  
茂、大表順子、岡部良雄・三冬、小野寺まゆみ、栗林宏  
三、河野美智子、佐々木裕、志田博明、品川睦生、高橋き  
よ子、高橋宣子、立田節子、田中志司子、辻 雅司、中村  
隆、中村萬千子、温井日出夫・潤子、畑 正輔、早坂泰  
夫・みどり、原 美保、樋口孝城、菱谷紀久子、松原寛  
直・敏子、丸島道子、道川富美子、村田睦子、本杉政司・  
朋子、山川美香、山室ゆかり、山本昌子、横山加奈子、吉  
田慶子、吉中宏太郎、鷺田善幸・幸江

以上43名

【担当幹事】栗林宏三、佐々木裕、畑 正輔、早坂泰夫、  
横山加奈子

## 野幌 森林公園

2017. 11. 5

【記録された鳥】コガモ、キンクロハジロ、トビ、ハイタ  
カ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヤマゲ  
ラ、カケス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガ  
ラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイ  
ス、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ミソサザイ、ツグ  
ミ、ルリビタキ、ウソ、シメ

以上26種

【参加者】今村三枝子、大表順子、大内康典、川村宣子、  
栗林宏三、白澤昌彦、鈴木勝之、竹内 強、田中慶洋・ひ  
ろ子、田辺 至、辻 雅司、辻田捷紀、富川 徹、中田達  
哉、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、辺見敦  
子、前田八郎、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山本育  
子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上29名

【担当幹事】竹内 強、富川 徹

## ウトナイ湖

2017. 11. 12

札幌市中央区 田守 真一

本年夏に夫婦で会員になりました札幌在住の田守です。入会前にも数回探鳥会には参加していましたが、会員となってしっかり勉強しようと考えた野鳥観察歴3年程度のビギナーです。自然が好きで、気軽に参加でき参加の都度新しい発見があるため、本会に入会しました。

当日は若干晴れ間はありましたが殆ど曇り、やや寒かったので防寒姿の会員の皆様が目立った探鳥会だったと思います。9:30野生鳥獣保護センター近くの湖畔から観察開始、12:10頃ネイチャーセンターで解散するまでの間、湖畔では多くの水鳥や猛禽類、またコース途中の木々ではマヒワの群れやエナガを観察することができました。ウトナイ湖での探鳥会なので、水鳥が多かったのですが、私たちに殆ど見分けがつかせませんでした。オジロワシは道東で見たことはありますが、ウトナイ湖では初めてでした。意外と道内広範囲に生息していることを知りました。オオワシは初めて見ることができましたが、飛ぶ姿が美しく見とれてしまいました。オオワシもオジロワシも円山動物園で見ることにはできますが(笑)、やはり自然の中に生きる姿を観察することは素晴らしいことだと実感した次第です。チュウビ、ハイタカ、ノスリの識別は出来ませんでした。

鳥合わせでは、37種の野鳥を確認できました。私たちににとってはこれまでで最も多い数でしたが、私たちだけでは4分の1にも満たなかったので、探鳥会参加の有難さを痛切に感じたところです。

なお、解散後の帰りのコースで、アカゲラとコゲラを見ることができ、またエナガも低い位置でしっかりと見ることができたことはラッキーでした。ウトナイ湖は飛行機の騒音が気になりますが、多くの鳥が見られることを実感しました。今後とも出来るだけ探鳥会には参加する予定ですので、引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、オオバン、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウビ、ハイタカ、ノスリ、カケス、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、マヒワ、カワラバト(ドバト) 以上37種

【参加者】北山政人、熊本進誠、媚山陽子、近藤章子、島崎康広、島田芳郎・陽子、田守真一・敦子、千葉仁美、辻雅司・方子、中田達哉、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、藤岡千鶴江、鷺田善幸 以上18名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

## 野幌森林公園

2017. 12. 3

【記録された鳥】アオサギ、オジロワシ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ 以上16種

【参加者】阿部 徹、阿部真美、五十嵐匡勝・悦子、今村三枝子、薄衣 弾、大表順子、大本光孝、栗林宏三、小池澄子、河野美智子、小西芙美枝、齋藤由美子、笹森繁明、新城 久、田中さちよ、田中 陽・雅子、田守真一、辻雅司、道場 優、富川 徹、中島伸樹・聖子・蘭、中田達哉、中村萬千子、畑 正輔、早川嘉彦、早坂泰夫、美頭佳範、平岡信夫、藤田 潔、古川睦美、松原寛直・敏子、村岡淳一、本杉政司・朋子、柳田純子・力輝、山本育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子 以上45名

【担当幹事】道場 優、早坂泰夫

## ヤング探鳥会

### 日和山・小樽港

2017. 12. 17



探鳥会で観察されたコクガン 撮影：今堀魁人さん

【記録された鳥】ヒメウ、ウミウ、アビ、オオハム、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミスズメ、オオセグロカモメ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、コクガン、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハクセキレイ、スズメ、カワラバト(ドバト) 以上22種

【参加者】6名

## 小樽港

2018. 1. 21

札幌市厚別区 住田 瑞生

うまれて初めての探鳥会への参加です。幼少より自然の生き物を眺めるのが好きで、今でも散歩中に木々の間をせ



わしなく動き回る影や、ゆったりと空を羽ばたいてゆく姿に目を奪われる質ですが、鳥をじっくり見ることを目的とする集まりには縁がないまま、気づけば半世紀ほどが過ぎてしまいました。

目的地の小樽を目指してバスが札幌駅を出て間もなく、発寒川(?)沿いの木にとまる巨大な(庭を訪れるカラに慣れた私の目にはそう映りました)鳥の後ろ姿が車窓を通して近づいてくるではありませんか。「ワシよ、ワシ!」、「オオワシかしら?」、「いや、オジロワシよ!」などの声が車中に響きます。トビの後ろ姿とはどうやって見分けるのだろうと思いをめぐらせる私の興奮が醒めやらぬうち、今度は巨大な姿が2つ並んで目に飛び込んできます。まだ移動中だというのに既に巨鳥を3羽も…これは幸先いいな、むこうでも色々見られるのかもと、期待は自ずと高まります。会員の方々が声にする鳥の名を手助けに、その後もレンジャクなど街路樹で遊ぶ鳥たちの姿を車窓から楽しみました。

第1目的地の日和山灯台付近では、風は比較的強いものの、雪は小降り程度で、その中を一列になって観測地点まで雪を踏みしめ皆でゆっくりと登ってゆきました。眼下はるかに白い波頭が荒々しく動く鉛色の海がひろがり、その水面にはまばらに浮かぶ水鳥の姿が見えます。鳥までの距離が遠く、持参の双眼鏡では図鑑で予習した特徴を捉えることができません。せいぜい、アカエリカイツブリやヒメウかな、と見当をつけるのが精一杯でした。アビっぽい鳥が波に揺られながらも着実に前進し続ける姿が気になりましたが、会の最後の鳥合わせでは名前が挙がっていませんでしたので見間違えだったのでしょう。鳥とは別に、岩礁に寝そべっているトドが実にのんびりとしていたのに対して、水族館の囲いの中と同類達が幽閉の己の身を嘆くかのようなもの哀しい声で啼いていたのが今も耳に残ります。双眼鏡を持つ指が寒さでかじかんできたので、皆さんよりも一足早く下へ降り、カモらしき数羽の群れが泳ぎ回るのが見えた港へと向かいました。そこでは鳥までの距離が近く、7羽のシノリガモが穏やかな水面をのんびり泳ぐ姿を確認できました。カモメが2種おり、一方はオオセグロカモメらしいところまでは見当が付いたのですが、もう一方が何かカモメかは判りませんでした。

第2の観察地点である祝津漁港に到着すると、上述と同じ港の対岸でした。会員の方に教えていただいたところ、もう一方のカモメはワシカモメであると判明。改めてシノリガモをじっくり眺めてみると、一見白黒2色に見えたのが、赤や青も混ざって結構複雑な模様だということが見て取れました。このカモは会員の方々にとっては極めてありふれた鳥らしく、「ああ、シノリねえ…」という落胆の声が以降の観察地点でも度々聞かれたのですが、初めて出会った私にとってはとても愛らしく、いつまで見ても見飽きませんでした。

第3観察地点の高島漁港では、オジロワシとの出会いが印象的でした。海に漂ったり、テトラポッドの上に止まったりしているカモメたちを眺めていたところ、突然その群



探鳥会で観察されたカンムリカイツブリ

撮影：道川富美子さん

れが一斉に飛び立ちます。「何かな?なんか来るのかな?」という幹事の方の声に誘われて上空に目を向けると、猛禽類と思しき姿が。オジロワシです。悠々と空を飛ぶ姿を双眼鏡で追うと、やがてそれは防波堤の上に舞い降り、何か白いものを食べている様子。食事の間はその場所から動かないでくれたおかげで、ワシを正面からじっくりと見ることができました。食事が終わるとワシは再び飛び立ち、長い間その上空を大きくゆったりと旋回し続けました。そうするうち、いつの間にか戻って来ていたカモメの群れが再び舞い上がり、次は何かと期待すると、今度はカラスに追われる別のオジロワシでした。意外だったのは、そのオジロワシたちの飛ぶ姿が、お世辞にも雄々しいといったものではなく、むしろユーモラスなくらいにぎこちなかったことでした。どうやら、比較的若い個体だったようです。また、カモメが騒いでも一向に影響されず羽繕いを続けるウミウの落ち着いた姿に、妻はしきりに感心していました。ここではウミネコも確認されたようですが、陸の猫を熱心に追う一人の動きにつられて他の会員の方々が一斉に双眼鏡を向けられる姿も確認されました。このような行動はバーダーの性なのか、それともネコブームの浸透度の高さを物語るものなのか興味は尽きません。

昼食を挟んでの会後半では、ウミアイサやカンムリカイツブリの姿を幹事の方が持って来て下さった望遠鏡で「目近」に、まるで冠羽の一本一本までを区別できるかと思えるほどにはっきりと見ることができ、その美しさに感激しました。日和山灯台でも臆することなく望遠鏡を覗かせていただければウミスズメやウミガラスの姿を目蓋に焼き付けられたのにと、今更ながら後悔しても後の祭です。最終観察点では昨シーズンの観察会で確認されていたというハギマシコを見つけることができず、皆さんはがっかりされた様子でした。何を見ても全てが新鮮な私は、海に浮かんで潜りの動作をしきりに繰り返すハジロカイツブリの姿をひたすら追いつけた後、すっかり満足して帰りのバスに乗り込みます。オジロワシのカップルに再びお目にかかれないのかと、窓の外を流れゆく木々を注意深く眺めていたのですが、その望みが叶えられぬうちに車は順調に札幌駅へ到着したのでした。

このような楽しく、ゆきとどいた会を企画、実施して下



さった幹事の皆さんに、心から感謝しています。機会があれば、また参加させていただきたいです。

【記録された鳥】 マガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ヒメウ、ウミウ、ウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ウミスズメ、ウトウ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、カワラバト (ドバト) 以上31種

【参加者】 石川 徹、今村三枝子、浦野真理子、太田由美子、可知典子、北山政人、熊本進誠、栗林宏三、媚山陽子、近藤直人、佐伯武美、品川陸生、新城 久、鈴木幸弥、住田瑞生、高正みちえ、高橋宣子、田中さちよ、玉置顕、辻 雅司・方子、中田勝義、長野隆行、野村美千代、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、藤岡千鶴江、松原寛直・敏子、水谷八重子、道川富美子、本杉政司・朋子、柳田純子・力輝、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、涌井博文 以上41名

【担当幹事】 北山政人、栗林宏三、畑 正輔

## 野 幌 森 林 公 園

2018. 2. 4



探鳥会で観察されたクマゲラ 撮影：長野隆行さん

【記録された鳥】 コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、カケス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ 以上15種

【参加者】 秋山洋子、阿部 徹、今村三枝子、浦野真理子、笠井好美、川村宣子、栗林宏三、佐藤奈緒美、住田瑞生、辻 雅司・方子、辻田捷紀、富川 徹、長野隆行、菲澤千代、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、辺見敦子、前田八郎、松原寛直・敏子、村中壽子、本杉政司・朋子、門馬公生、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子 以上29名

【担当幹事】 早坂泰夫、松原寛直

## 鳥 民 だ よ り

### ◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会 場：札幌エルプラザ 2階 展示スペース  
(札幌市北区北8条西3丁目)  
JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い

期 間：2018年5月10日(木)～5月23日(水)

展示時間：9：00～22：00

(ただし初日は17：00から、最終日は16：00まで)

応募要領：写真は、最近3年以内に原則として北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください(原則としてお一人2枚以内とします。3枚以上の場合は展示優先順位を明記してください)。

### 募集締切：

5月2日(水)までに、下記の愛護会事務所に送付または持参してください(必着)。

(〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5階 自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 宛て)

### 準備・展示作業：

5月10日(木) 13：00から事務所にて額付・キャプションを作成し、引き続き15：00から会場にて展示作業を行います。

お手すきの方はご協力をお願いします。

\*なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で6月に1ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

### ◆ 総会のご案内

日 時：2018年(平成30年)4月11日(水) 18：00～

場 所：かでの2・7 110会議室(1階)

(札幌市中央区北2条西7丁目)

※総会終了後に懇親会を予定しています。

【お問い合わせ】 畑 正輔 (011-894-0017)

### 【新しく会員になられた方々】

野村美千代(北広島市) 上田 広明(江別市)

可知 典子(札幌市中央区) 高山 俊春(旭川市)

長野 隆行(札幌市白石区) ほか1名



- ☀ 探鳥会 (宿泊探鳥会を除く) は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接、現地に集合してください (昼食、双眼鏡等の観察用具、筆記具等をご持参ください)。
- ♣ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ↑ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します (小雨決行)。
- ☀ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ♣ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。

【探鳥会の問い合わせ】

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 10:00~16:00 (土・日曜日、祝日を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月15日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス: 地下鉄東豊線環状通東駅発 (北札苗線東69番・東79番) 「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月22日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス: 岩見沢ターミナル発 (月形行) 又は月形駅発 (岩見沢行) 「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(祝)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	夕鉄バス: 新札幌駅発 (文京台南町行) 「大沢公園入口」下車、又はJRバス: 新札幌駅発 (文京台循環線) 「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園 (エルクの森パークゴルフ場向い) 9:00
	定鉄バス: 札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発 (定山溪温泉行又は豊滝行) 「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月6日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れるキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月13日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月20日(日)	鶴川河口	むかわ温泉四季の館駐車場 9:45
	道南バス: 札幌駅前又は大谷地バスターミナル発 (浦河行/ベガサス号) 「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月27日(日)	野幌森林公園 (早朝探鳥会)	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。 早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月3日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 9:10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月10日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス: 地下鉄東西線白石駅発 (川下線白24番) 「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月17日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月24日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス: 地下鉄環状通東駅発 (北札苗線) 「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点で草原の鳥たちを楽しみます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円 (会計年度 4 月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 11 丁目加森ビル 5・6 階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HP のアドレス <http://www.aigokai.org>